二、馬賊の女

朝になった。
ドアがノックされ、
「おはよございまぁーす」
ソヒョンが朝食を運んできた。ロシアの黒パン(ボロジンスキー)にキャベツのスープ、そして茶だった。
ロシア人の血を引く朝鮮人少女のソヒョンが
「たくさん、たべてね」
と笑顔で去っていった後、私は堅く酸味の強い黒パンをスープに浸(ひた)して口に運び、朝食を平(たい)らげた。それからしばし煙草を喫してから、階下の食堂に赴いた。睾丸はまだ痛みが残っていたが、歩けないほどではない。
食堂には円形の食卓が三つ並べられ、苦力(クーリー)らしい支那人の男たちが三人ほど、食事をしていた。
「あら、きくちさん、だいじょぶか？」
給仕をしていたソヒョンが気遣ってくれた。私は微笑して、
「괜찮아요(ケンチャナヨ)（大丈夫だ）」
と朝鮮語で返すと、
「きくちさん、じょうず」
と明るく手を叩いて喜んだ。私は、
「太太(タイタイ)（女主人）を呼んできてくれ」
と頼むと、奥に引っ込んだ。やがて、支那服姿の水野ハナが顔を出し、私が坐る食卓に向かい合って席に着いた。
「おはようございます」
と頭を下げたハナは、
「昨夜は、失礼しました」
と謝った。私は手を振って、
「いや、私は気が利(き)かなくてね」
と言うと、ハナは首を傾(かし)げて私を見つめた。幼い子供が、変わった昆虫などの小動物を見つめるような眼差しだった。
私は、居住まいを正した。
「ところで相談なのだが、しばらくここに逗留(とうりゅう)したい」
水野ハナは、一瞬眼を光らせたが、すぐに笑顔を浮かべ、

「部屋は空いておりますけれど、どのくらい御逗留されますか？」
昨夜と打って変わり、すっかり客に対する女主人の口調で訊ねた。私は、
「特に予定はないのだが、瑷琿は、日本ではまったく知られていない街だ。数日逗留して、帰国したら本でも書こうかと思ってね」
と言うと、ハナは曖昧な面差しで頷き、
「よろしゅうございます。せいぜい、お世話させていただきます」
と頭を下げた。私は、
「一度、ブラゴベシチェンスクに戻って、着替え等を用意してから、明日また来る」
と告げて、いったん聚英栈を出た。
マラトフ大尉の家に戻ると、珍しく大尉は帰宅していた。
「ほう、瑷琿に何日か滞在するのか」
夕食の席で予定を告げると、大尉は眼を丸くした。
「一度行ったことがあるが、不潔な街だった。哂し首は見たかね」
「Дa（はい）」
「清国は、一世紀は遅れている。これを指導してやるのが、われわれ文明人の義務だ」
ウォッカの酔いも手伝って、マラトフ大尉は気焔をあげた。
「君たち日本人も、われわれに学んだから、清国に戦争で勝てたのだ。ともに、眠れる清国を導いてゆこうではないか」
翌朝、船で瑷琿に戻り、聚英栈に着くと、食堂で水野ハナとソヒョンが待っていた。
「今日は、街を見物なさいますか？」
と問われて頷くと、ハナは、ソヒョンの肩を抱いて言った。
「では、この娘を案内役にしましょう。土地不案内な方の一人歩きは危険ですし、いざとなれば役に立ちます」
「それは、ありがたいが、客栈（旅館）の人手が足りなくなるのではないか？」
「大丈夫です。この娘の他にも人を雇っていますから」
あるいは、私のためを思ってではなく、ソヒョンを見張りにつける意図があるのかもしれない。ならばこちらは、この聡明そうな少女を通して、ハナの正体を探るだけだ。
「では、よろしく頼む」
ソヒョンにそう言って頭を下げると、少女は悪戯っぽく笑って言った。
「変な奴が現れたら、わたし、今度はそいつのきんたま、蹴る」
瑷琿には、胸と背に「都統府所属規兵」と大きく赤字の布を縫いつけたダブダブの服の番兵が槍を持って立っている、日本の櫓に似た城門や、都統府や鎮守使公署など煉瓦造りの官署以外、取り立てて見るべきものはない。
朝から半日歩き回って、食堂に入って昼食をとり、食べ終えるやソヒョンは、
「では、帰る」

と言った。
「これで終わりか？」
と問うと、ソヒョンは笑って頷いた。私は言った。
「困ったな。それでは幾日もここに逗留する意味がない。市外に何か名所はないのか？」
ソヒョンはしばらく小首を傾げて考えていたが、やがて口を開いた。
「帰(かえ)て、太太(タイタイ)に、相談(そだん)する」
食堂を出ると、太陽は沖天(ちゅうてん)にのぼり、穏やかな風がほのかに暖かかった。
途中の屋台で焼いた餅(もち)を買ってやり、頬ばりながら、いまだ流氷が漂っているアムール川の岸辺を散歩した。
私はソヒョンに問うた。
「昨夜遅く、お客が来ていたね？」
「お客？」
ソヒョンは首を傾げた。私は言った。
「うん、馬に乗った男が三人、来ていただろう。すぐに帰ったけれど」
ソヒョンはしばらく返事をせず、手にした餅をかじりながら歩いていたが、やがて口を開いた。
「わたし、寝てた。知らない」
すぐ返事をしなかったのは、何かを隠しているからだろう……。
やがて私たちは、アムール川の船着き場に出た。ちょうど、対岸からの船が接岸していて、三人の乗客が桟橋(さんばし)に降り立っている。二人連れの商人を除く一人は、長身で毛皮のコートを羽織り、重そうなカバンを提(さ)げた若い支那人女性だった。
同じ支那人といっても、瑷琿(あいぐん)のほとんどの住民は満州族だが、彼女は漢民族のようだった。細面(ほそおもて)に切れ長の一重瞼(ひとえまぶた)。唇が紅(あか)く、人目を惹(ひ)く美貌の持ち主である。
女は、しばし桟橋を出て、周囲を見廻していたが、ふと、私たちに向かって歩み寄り、支那語で問うた。
「不好意思(ブーハオイース)、我想到聚英桟(ウォシャンダオヂィーインヂァン)（すみません、聚英桟に行きたいのですが）」
ソヒョンは満面の笑みで、人さし指を自分の顔に近づけた。
「我是(ウォシー)、聚英桟的小孩(ヂィーインヂァンドゥーシャオハイ)（私、聚英桟の小間使いです）」
「太好了(タイハオルゥーァ)（それはよかったわ！）」
女はにっこりして、案内してほしいと頼んできた。
私たちは連れだって聚英桟に向かった。ソヒョンは何かと女に話しかけたが、女は微笑(ほほえ)むばかりで、あまり口をきこうとしなかった。ただ、旅順(りょじゅん)から船でウラジオストックに至り、そこから私と同様、汽船でアムール川を十日間かけてやって来たとだけ言った。
彼女が、かなりの長旅をしてここに至った事は、擦(す)り切れたコートや、汚れた高統靴(ブーツ)からも窺(うかが)える。
聚英桟に着くと、店員たちが食堂で昼飯の食器を片付けていた。太太(タイタイ)は？　とソヒョン

が問うと、薛(シュエ)という名の五十がらみの掌櫃(ジャングー)（番頭）が、ハナは出掛けて帰りは夜中になりそうだと答えた。女は訊(たず)ねた。
「有房間出租嗎(イォウファンヂィエンチゥーツゥーマァー)（部屋は空いてますか？）」
二階の、私の隣の部屋が偶然空いていた。女は長期逗留するからと宿代を前払いし、宿帳に「劉春燕(リゥチュンイェン)」と書き付けた。
その夜。
私は外出せず、食堂で夕食をとった。アムール川で獲れた鮭のグリルだった。私の他には、客の姿はなかった。劉春燕と名乗る支那女も、部屋から出てこない。
「太太(タイタイ)！」
食堂の隅に坐っていたソヒョンが立ち上がった。玄関で馬が嘶(いなな)いている。見ると、ロシア帽に毛皮の外套をつけた水野ハナが、馬から飛び降りた。
「我回来了(ウォフィライルゥーァ)（ただいま）！」
と食堂に入ってくると、ソヒョンや掌櫃(ジャングー)の薛(シュエ)をはじめ、店員たちがいっせいに「回来(フィライ)了(ルゥーァ)、太太(タイタイ)（おかえりなさい）！」と出迎えた。
外套を脱いでソヒョンに預けたハナの脇の下に、ホルスターに入った軍用拳銃が提(さ)げられているのが眼に入った。
武装して、しかも馬で。どこに出掛けていたのだろう……。
「太太(タイタイ)！」
いつの間にか、劉春燕が階段を半ば降りたあたりに立っていた。ハナは見上げて、
「歓迎光臨(ファンイングァンリン)（いらっしゃいませ）」
と頭を下げると、春燕は階段を下りてハナに歩み寄り、無言で右手を差し出した。
掌(てのひら)に、紅色のスカーフが握られている。
ハナは、そのスカーフをしばし見つめ、やがて、「一起走吧(イーヂィーツォウバァー)（行きましょう）」と春燕を促し、肩を並べて階段をあがっていった。
旅順から、この奥地までわざわざ、ハナを訪(たず)ねて来たというのか……。
いったい何者だろうと考え込んでいると、ソヒョンがウォッカの壜とコップを運んで私の目の前に並べた。
「あの女は、ハナさんの知り合いかい？」
そう問うと、ソヒョンは、
「しらなぁい」
と笑顔ではぐらかすように答え、それから声を潜めた。
「きくちさん、太太(タイタイ)のこと、なぜそんなに知りたい？」
ぎょっとしたが、ソヒョンは、他意のなさそうな笑みを浮かべ、さらに問うた。
「太太(タイタイ)のこと、好きか？」
「馬鹿を言うな」
私は苦笑し、ウォッカを呑み干した。

「ただ、あの女性、わざわざ旅順からウラジオストック経由でここまでハナさんに会いにくるなんて、よほど深い理由があるのかと思ったんだ」
「そういえば、太太(タイタイ)も、旅順にいたこと、あったと言ってたな」
「そうなのか？」
旅順と天津は、海を挟んで向かい合っている港湾都市だ。
「うん、六年前までは、旅順にいたって」
六年前といえば明治二十七年、日清戦争が始まった年で、要塞と軍港を備えた旅順は、激戦地の一つだった。
ウォッカの酔いが回ったので、私は自室に戻った。隣の部屋のドアの隙間から明かりが漏れていた。水野ハナと劉春燕という支那女が室内にいるはずだが、話し声は聞こえてこない。
寝ようとベッドに入ると、昨夜と同じく馬の嘶(いなな)きが聞こえた。窓のカーテンをそっとめくると、分厚い外套を着た水野ハナと、同じく防寒着を着込んだ劉春燕が並んで馬に乗り、やがて馬を駆って闇夜へと消えた。
眠れぬまま、私は部屋に置いてあるウォッカの杯を重ねた。眠りについた時は、すでに夜明け前だった。

翌日。
眼を覚ましたのは、すでに昼過ぎだった。ひどく頭痛がした。ウォッカの酔いが残ったまま、私は食堂へと降りた。
食堂には背広姿の男が一人、食卓について茶を喫(きつ)していたが、私を見るなり、右手を挙げた。
「よう」
男を見て、私は驚いた。
「おお、伊東じゃないか！」
伊東は、陸軍士官学校時代の同級生だ。日清戦争中は同じ中尉だったが、今では大尉に昇進している。同期のなかで成績はトップクラス、いずれは大将に昇進してもおかしくないと言われた逸材だ。
今は、ウラジオストックの日本総領事館に、駐在武官として勤務している。駐在武官は、赴任先の高級軍人と交流する一方で、情報収集の任にも当たっている。私自身、ウラジオストックに滞在中は様々な面で伊東大尉に面倒を見てもらっており、ブラゴベシチェンスクに赴く旅費や必要書類の手配もしてもらっていた。
私は向かい合って坐った。伊東は言った。
「ブラゴベシチェンスクの在留日本人会事務所で聞いたら、貴様、瑷琿(あいぐん)に向かったというのでな。ここまで追いかけてきたのだ。幸い、船着き場で君の噂を聞けた。おかげですぐに見つけられたよ」

私は驚いた。
「私のことが、噂になっているのか？」
「ああ、この街で日本人といえば、この客桟の女主人と貴様しかいない。二人ぎりの日本人が一つ屋根の下にいるとなれば、噂はすぐ広まる。それで……」
伊東は食堂を見廻した。
「その、美貌の日本女性は、どこにいるんだ？」
私はソヒョンを呼び、ハナさんはいるか？　と問うた。するとソヒョンは、
「太太（タイタイ）、出掛けた。五日くらい戻らない」
と答えた。
「五日？　どこに行ったんだ？」
と問うと、ソヒョンは、知らない、と首を振り、伊東の目の前に置いた茶碗を運んで、厨房へと去った。
「五日もお出かけか。それまでここにも居られん。残念だな」
と言う伊東に、私は、
「外に出ないか」
と言った。相談したいことがあったのだ
伊東大尉を高級支那料理店に誘った。個室で昼食を取りながら私は、ここで体験した事を洗いざらい喋った。
一昨夜、馬賊らしい三人の男が聚英桟（チイーインヂアン）に立ち寄り、すぐに去っていった事。昨日、旅順から来た劉春燕という支那女とハナが、真夜中に二人して馬でどこかに発（た）った事。
「なるほど……」
ウラジオストックで情報収集の任に当たっている伊東大尉は呟いた。
「いずれにせよ、その水野ハナという女、馬賊と繋がりがあると見て、間違いないな」
「俺もそう思う。それより気になるのは劉春燕だ。女が独り旅で、旅順からわざわざ会いにくるなんて、よほどの理由があるに違いない」
「その春燕という女だが……」
伊東は声をひそめた。
「ハナに、紅いスカーフを見せたそうだな」
「ああ、それを見て、ハナは春燕の部屋に入ったんだ」
「ひょっとすると」
伊東は呻くように言った。
「その女、義和団の一味かもしれんぞ」
「義和団だと？」
私も声をひそめた。
「義和団が、この地にまで来てるのか？」
そう問うて私は、マラトフ大尉の妻リザヴェータ夫人の言葉を思いだした。

――夫は拳匪（チュアンフェイ）のため大忙しだって言ってましたわ……。
「今や義和団の勢いは、山東省を飛び出して、北京や天津にも及んでいる。西洋ぎらいの清国政府が陰で支援しているという噂があるくらいだ」
伊東大尉は言った。
「そして、義和団には、女だけの組織もあるというのだ」
「女だけの？」
「ああ、紅灯照（ホオンダアンヂアオ）といって、全身紅い装束を身につけている。拳法や刀術にも優れ、女ながら侮（あなど）れないそうだ」
「そうか」
そうだとすると、ハナは、春燕が義和団の一味と知って、二人で出掛けたという事になる……。
考え込む私に、伊東は言った。
「もし、水野ハナという女が、馬賊と繋がりがあるとすれば、紅灯照（ホオンダアンヂアオ）は満州馬賊と手を組もうとしているのではないか？」
伊東は身を乗り出した。
「なあ、菊池。君は、その水野ハナと親しくなったのか？」
「親しいというほどではないが」
「君も承知しているだろう。参謀本部は、来たるべきロシアとの衝突に備え、満州の馬賊を味方につけておきたいと、色々と動いている。逆に、馬賊が義和団と手を結ばれては困るのだよ。わが帝国政府は欧米列強と緊密に連携して、義和団に当たろうというのが大方針なのだ。満州馬賊には、ロシアのためでも、義和団のためでもなく、わが大日本帝国の味方になってくれないと困るのだ」
「それは承知している。ただ……」
私は言った。
「私は、水野ハナという女の正体も、よく知らないのだ」
「では、親しくなってくれ。なんなら妾（めかけ）にすればいいじゃないか」
妾という言葉に、私は思わず眉をひそめたが、伊東は気づかぬげに続けた。
「こんなところまで流れてきた女だ。どうせ醜業婦あがりだろう。貞操観念なんかありゃしない。口説（くど）いちまえば、いいじゃないか」
そのぞんざいな言い方に、かすかな不快感を覚えた。伊東はそれに気付かぬげに、鞄（かばん）から長方形の紙包みを、私の目の前に置いた。そっと紙を剥がすと、中身はロシアのルーブル紙幣だった。それから、ずしりと重そうな革袋を取り出した。こちらには、清国政府発行の銀貨が入っていた。
「参謀本部からの軍資金だ。思う存分使ってくれ。足りなくなったら、いくら請求してくれてもいい」
「要するに……」

私は言った。
「水野ハナの身辺を探るのは、軍からの正式な要請と受け取るべきなのか？」
伊東大尉は答えず、
「期待しているぞ」
とだけ言った。

その夜、伊東大尉は聚英桟（ヂィーインヂァン）に一泊し、翌朝、出発した。船着き場まで見送ってから、私はしばらく街をぶらついた。
勝手な事を言いやがる……。
見ず知らずの女を「どうせ醜業婦あがりだろう」と決めつける伊東大尉の面差しに、吐き気さえした。
日本人が大嫌いで、からまれると睾丸を蹴り上げるような水野ハナだ。彼女がほんとうに馬賊と繋がりがあるのか、義和団と手を結ぼうと考えているのか、そのあたりは分からないが、いずれにしても、日本軍の思うように操れる女だとは、とうてい思えなかった。
とはいえ、ロシアに来て以来、滞在費用や必要書類はすべて伊東大尉の計らいで、陸軍から出ている。逆らう事などできようもない。
ともあれ、ハナの真意だけでも探っておかねば……。そう思いつつ、通りの角を曲がって狭い路地にさしかかった時。
「あ……！」
仰天した。目の前に、あの劉春燕（リウチュンイェン）という支那女が立っていた。
「哈（ハ）！」
甲高い掛け声とともに、顔面に重い衝撃が走った。春燕は飛び上がって空中で一回転し、靴の先を私の頬に打ち込んだのだ。
私は数歩よろけ、倒れそうになりながら、近くの家の壁に手をついた。その私の襟首を誰かが掴み、振り向かされた。
目の前に、水野ハナの顔があった。
あの激痛が、股間を襲った。ハナは、私の睾丸を蹴り上げたのだ。
もはや、立っているどころか、呼吸さえできなかった。私は両手で股間を押さえ、ぶざまに地面に転がった。嘔吐がこみ上げ、頭と下腹部ががんがん痛む。眼から滝のように涙が噴き出した。
「宋紀（ソオンヂィー）！」
ハナが叫んだ。建物の陰から、雲を突くような支那人の大男が現れた。ハナは大男に命じた。
「帯来（ダァイライ）（連れて行け）！」
そこは、薄暗い煉瓦（れんが）づくりの倉庫だった。穀物を詰め込んでいるらしい藁（わら）を編んだ袋が、

そこかしこに置かれている。
冷たい床に放り出された私を、水野ハナと劉春燕、宋紀と呼ばれた大男が囲んでいた。
「菊池真清(きくちまきよ)」
ハナは冷たい口調で言った。
「忠告したはずだよ。世間知らずの軍人あがりが、余計な事に口を突っ込むな、と」
「なんのことだ……」
私は、下腹部の痛みをやっと堪(こら)えながら言った。声がしわがれていた。
「とぼけるんじゃないよ！」
ハナは、硬いブーツで床をドンと踏みならした。
「あの、伊東って大尉と密談してただろ。一体何を企んでるのさ？」
「伊東大尉には、語学留学の面倒を見てもらっているだけだ」
「下手な嘘つかないほうがいいよ」
ハナは、うずくまる私の目の前に膝を曲げて坐り、顔を寄せて言った。
「あたしを妾(めかけ)にして、馬賊を日本軍の味方につけ、でも義和団とは手を結ばせないようにするって相談してただろ？」
全身から血の気が引いた。
なぜ、それを知っている……。
「아저씨、미아네요(アジョシ、ミアネヨ)(おじさん、ごめんね)」
いつの間にか、倉庫の隅にソヒョンが立っていた。申し訳なさそうな面差しで、続けた。
「あの店で、ぜんぶ、聞いた」
ソヒョンが、あの中華料理の個室に潜んで、密談を全部聞いていたというのか？
なんて連中だ……。
「この瑷琿(あいぐん)で、あたしに力を貸してくれる店が、何軒あると思ってるの？」
ハナは言い放った。
「わざわざ、そんな店を選んで密談なんて、間抜けすぎる」
「太太(タイタイ)」
劉春燕が口を挟んだ。
「這位(ヂューウェイ)、怎麼辦(ヅェンマバァン)(こいつ、どうする)？」
「そうねえ……」
ハナは、しばし腕組みして考え込んだ。
「殺すのは簡単だけれど、日本軍の紐付(ひもつ)きを殺しちゃったら、あとあと面倒ね」
そう言ってハナは、私に問うた。
「で、お前は、正直、どうしたいの？　日本の軍人らしく、伊東って大尉の命令に素直に従うだけ？　それとも……」
いきなりハナは、私の睾丸を鷲づかみにした。激痛に悲鳴をあげる私の胸ぐらを掴んで、床に押し倒した。

「お前の本音を言え、どうなんだ！」
「私は……」
激痛に苛まれながら、私は声を振り絞った。
「伊東は大嫌いだ！」
意外な答えを聞いたというふうに、ハナは眼を見開いた。私の睾丸を鷲づかみにした手の力がゆるんだ。私はさらに叫んだ。
「あんな奴の言うことなんか、聞くもんか！」
それきり、意識を失った。

何時間たったのだろうか。
意識を取り戻した時、私は何時の間にか聚英桟（ヂィーインヂァン）の、私が泊まっている部屋に運び込まれ、ベッドに横たわっていた。
そして、ベッドの側の椅子に、水野ハナが坐って、私を見つめていた。
「お前は、やっぱり不思議な男だね」
そう言って、ハナはベッドに上がってきた。
仰向けに横たわっている私の身体を覆（おお）うように、腰のあたりにまたがり、顔を近づけてきた。彼女の豊かな乳房が、衣服越しに、私の胸板に触れた。
「あたしたちと、手を組む？」
囁（ささや）くような問いに、私は顎を動かして頷いた。ハナは問うた。
「あたしを、思い通りにはできないって、分かってるよね？」
「ああ……」
「もしも、あたしがしたい事と、日本軍がやりたい事が、違っていたら、お前はどっちにつくの？」
「決まってる」
自分でも意外なほど、すらすらと答えが出た。
「私は、水野ハナにつく」
ハナは微笑し、私の顔を抱いて、自分の胸に押しつけた。やわらかな乳房が私の顔を暖かく包んだが、次の瞬間、激しい痛みが全身を貫いた。
ハナは、鈍痛が残る私の睾丸を掴んだのだ。
「あんたが本気かどうか……」
ハナは言った。
「明日、試させてもらうよ」

翌朝。
私はソヒョンとともに馬車に乗せられ、聚英桟（ヂィーインヂァン）を出発した。御者（ぎょしゃ）は宋紀（ソォンヂィー）がつとめ、ハナは騎馬だった。他に、三人の武装した騎馬の男たちが、周囲を固めた。

「あんたは明日、あたしたちと一緒に南に向かう」
狭い馬車に揺られながら、昨夜、ハナから聞かされた話を思い出していた。
「一日がかりで行ったところに、小さな村がある。かつては人が住んでいたが、今では廃村だ。そこで、ある取り引きが行われる」
満州人の砂金密売人が、砂金を代金に、阿片商人から大量の阿片を仕入れようとしているというのだ。
阿片は芥子から抽出される麻薬で、十九世紀に英国によって支那にもたらされた。その惨禍は甚だしく、清国衰退の原因になったとも言われており、世界各国では阿片禁止の声が上がっているが、裏では大々的に取り引きされ、厖大な金が動いていた。
「その現場を押さえる」
と言うハナに私は問うた。
「押さえて、どうするのだ？」
「皆殺しだ」
ハナは平然と言った。
「その砂金密売人は、あたしたちと組んでいたが裏切って、敵のロシア人と取り引きしている。制裁を与え、見せしめにしなければならない」
「しかし……」
私は言った。
「一緒にいる阿片商人はどうするのだ？」
「殺す」
ハナは顔色ひとつ変えずに言った。
「そっちは、別の理由があるが、今は言わない。後で教えるよ」
四騎に守られた形で、馬車は、地平線の彼方まで家一軒、人っ子ひとり見あたらぬ満州の大草原を突っ切って進んだ。揺れがひどかったが、私と並んで馬車に乗っているソヒョンは、ずいぶん馴れているようで、鼻歌をうたいながら、楽しそうに編み物をしている。
「気分悪いか？」
今にも嘔吐しそうな面差しに私に、ソヒョンは、懐の紙包みを開き、四角い形をした白い飴を差し出した。
「薄荷飴」
と言って笑った。私は礼を言って受け取った。口のなかに清涼感が拡がり、ようやく気分が落ちついた。
「ありがとう」
礼を言うと、ソヒョンは軽く微笑み、肩にしょったずだ袋から鞣し革とナイフを取り出し、刃を研ぎ始めた。刃は少女が持つには幅が広く、料理用とは思えない。
――皆殺し。
昨夜のハナの言葉が思い出された。これから自分たちは、大勢を殺害しにゆくのだ。

まだ十二歳の少女と一緒に。そして彼女はナイフを研いでいる……。

やがて日が沈んだ。ハナは、村から十数キロの地点で馬車を停めさせ、野営の準備を命じた。馬車に携帯していた粗末なテントを張り、男たちが交替で寝ずの番をつとめる。火を絶やすと狼や虎が襲ってくる。いつでも発射できるよう小銃に弾丸をつめ、襲い来る眠気と戦うのだ。

私もその役目を引き受けようと申し出たが、ハナは首を縦に振らなかった。私に武器を渡したくないようだった。

夜が明け、私たちは野営地を出発した。

二時間ばかり進むと、小高い丘があった。馬車を停め、馬を木に繋ぎ、武器のみを携えて丘にのぼった。

丘の頂上に登ると、反対側に下った先は、背の低い土塀に囲まれ、数軒の家が集まった集落だった。土塀に門を穿った入り口に、背中に小銃を背負った支那人の男が二人、見張りに立っている他、人影はない。だが、広場に繋がれた馬の頭数から見て、家のなかに少なくとも十人はいるはずだった。

「ソヒョン」

丘の見晴らしのいい場所に移動し、ハナはソヒョンに目配せした。ソヒョンは心得顔に、丘を降りた。樹の間を縫って丘を降りきると、数十メートル先が集落の入り口だった。

入り口を守っている男たちは、不意に現れた十二歳の美少女に、顔を見合わせて戸惑っていた。一人の男がソヒョンに歩み寄り、何か問うた。ソヒョンは笑顔で男を見上げた。

いきなり、ソヒョンは一人の男の股間を蹴り上げた。同時に懐からナイフを引き抜き、もう一人の喉を切り裂いた。

血を噴く喉を両手で抑えて倒れた男には目もくれず、ソヒョンは、股間を両手で抑えてうずくまった男の背後に回った。喉にナイフをあてがい、微塵の躊躇いも見せず、横に動かした。

二人の男は、十二歳の少女によって、あっけなく殺害された。ソヒョンはで土塀の陰に移動して身を隠し、こちらに向かって手を振った。

「走你（行くよ）！」

ハナが小さく叫び、男たちは銃を手に、集落に向かって丘を駆け降りた。

ハナ、宋紀、三人の馬賊、そして私は、村の入り口の土塀に身を潜めるソヒョンの側に駆け寄った。

「どの家？」

ハナが問うと、ソヒョンは、

「いちばん大きな家」

と指さした。広場に面して建っている煉瓦造りの家だ。僅かに開いた窓の向こうに、人が見え隠れする。

「好（よし）」
ハナは小さく頷き、ソヒョンの頭を撫でながら、私に向かって言った。
「お前は、合図するまで、ここで待て。余計なことするんじゃないよ」
それからソヒョンの耳元で何か囁いた。ソヒョンが頷くと、無言で四人の馬賊たちを促し、煉瓦造りの家に向かって、足音を忍ばせて近寄っていった。
「きくちさんが、おかしなことしたら……」
ソヒョンは、私の耳に顔を寄せ、いつもの快活な調子で言った。
「殺せ、だって」
私は思わず、村の入り口に倒れている二人の見張りの屍を見やった。十二歳の少女が、音ひとつ立てず二人を即死せしめたのだ。切り裂かれた喉から流れ出た血が、大きな血溜まりを作っているが、ソヒョンは返り血を一滴も浴びていない。
ハナと宋紀は、煉瓦作りの家の正面入り口に忍び寄り、他の馬賊たちは、家の外の倉庫や井戸など、物陰から掩護する態勢をとった。
宋紀は、入り口のドアに鍵が掛かっているのを確かめ、腰に挿していた手斧を引き抜いて振り上げ、ドアの把手めがけて打ち下ろした。
「是誰（誰だ）！」
内部から叫び声がした。同時にハナと宋紀がドアを蹴破り、玄関に突入した。
銃声が響いた。
一人の支那人が、窓ガラスを割って外に飛び出した。たちまち、外で構えていた馬賊たちの銃弾の餌食となった。馬賊たちは窓や裏口に接近し、内部に銃弾を撃ち込んだ。
銃撃戦は数分で終わった。
宋紀が家のドアから顔を出し、ソヒョンに向かって手招きした。
「きくちさん、いこ」
ソヒョンに促され、私は立ち上がった。武器を持っていなかった私は、自然とソヒョンについていく形になった。ソヒョンは、別に恐がりもせず、家へと入っていった。
家の中は血の海だった。銃弾を浴びた支那人の屍が、そこかしこに倒れ伏している。額を打ち抜かれている者、蜂の巣のように胴体や顔に複数の穴の空いた者、至近距離から撃たれたらしく頭部が半ば吹き飛んでいる者……。
ただ一人、万歳するように両手を上げ、真っ青な顔で震えて立っている者がいた。
ハナは、その男の額にぴたりと拳銃の銃口を突きつけ、冷たい顔で凝視している。
男の面差しに見覚えがあった。頭を丸く刈り上げ、あごひげを蓄えている。小さな眼がきょろきょろと四方八方に彷徨っていたが、不意に私の顔を見つめて叫んだ。
「中尉殿！　菊池中尉殿ではありませんか！」
室内にいた全ての眼が、私に向けられた。男はさらに泣きそうな顔で叫んだ。
「井口です！　井口伍長です！　中尉殿、助けてください！」

井口……！

六年前の日清戦争当時、台湾で私の従卒をつとめていた陸軍伍長、井口虎吉だった。

なぜ井口が、こんなところに……。

私の戸惑いをよそに、井口はわめいた。

「中尉殿、お忘れですか！　あたしは中尉殿の命を助けてさしあげたんです。忘れたとは言わせませんぜ！　後生ですから、助けてください！」

――そう、六年前。台湾の嘉義城。

井口伍長と二人で偵察に出た私は、とある屋敷から銃撃を受けた。肩を負傷して井口は人事不省となり、私は無我夢中で屋敷内に銃弾を撃ち込んだ。そして五歳の幼女を、彼女の父親ともども、射殺してしまったのだった。

その私を、幼女の母親らしい女が襲った。私の急所を蹴り上げ、取り落とした小銃を構えて、私を撃とうとした。

私を救ったのは、意識を取り戻した井口伍長だった。屋敷内に駆け込んできた井口は、私に銃を向けた女を見るなり、引き金をひいた。女は頭を撃ち抜かれ、即死した。

中尉殿、少しは懲りてくださいや。

井口伍長は、私を助け起こしながら言った。

女だからと容赦していちゃ、命がいくらあっても足りませんぜ、ここは、生きるか死ぬかの戦場なんですからね。

井口は戦争終結後、四国の故郷に戻った。だが、生来の風来坊で、堅気の仕事に落ちつく気のない井口は、一年たらずで大陸に渡ったと風の便りに聞いていた。

まさか、この地で密貿易に関わっていたとは……。

「こいつは……」

ハナが、私を見て問うた。

「お前の部下だったのか」

「ああ……」

私は俯（うつむ）いて、小さく答えた。井口は、眼を丸くしてハナに問うた。

「日本人なのか？」

ハナは答えなかったが、井口は懇願した。

「頼む、同じ日本人のよしみで助けてくれ」

怪訝（けげん）そうな顔で見つめるハナに、井口はさらに続けた。

「俺は、お前と同じ日本人なんだ。頼む、情けをかけてくれ。金ならやる。砂金も阿片も全部くれてやるから、命だけは……」

「うるさい！」

ハナはいきなり、井口の股間を膝で蹴り上げた。

「うーーーっ！」

甲高い悲鳴とともに、男は股間を両手で押さえてうずくまる。ハナは、左手で男の頭髪

を掴(つか)んで顔をあげさせ、うなじのあたりに銃口を押しつけた。
「ふざけるな！　あたしは日本生まれで十三まで日本で育ったが、自分が日本人だなんて思っちゃいない！　お前が何人だろうが、敵は殺す、それだけだ！」
そう言って、井口を仰向けに転ばして、踵(かかと)で股間を踏みつけた。井口は絶叫し、顔を左右に振って悶絶した。
「捆上(クゥンシアン)（こいつを縛れ）！」
ハナに命ぜられ、馬賊たちは井口を、室内の柱に両手を後ろに回して縛り付け、足首も柱に固定した。
「お前は、井口虎吉だね」
ハナは、青ざめた面差しで激痛を堪(こら)える井口に言った。井口は答えなかった。いや、苦痛のあまり答えられなかったのだ。
ハナは、またも彼の股間に膝を打ち付けた。
「ぎゃあああ！！！」
絶叫して号泣する井口を尻目に、ハナは私に向かって問うた。
「こいつは、元日本陸軍の下士官、井口虎吉で間違いないね」
「あ、ああ……」
私は頷き、なぜハナが井口の事を知っているのか、疑問をぶつけようとして躊躇(ためら)った。ハナはそれを察したように言った。
「日清戦争が終わった後、こいつは再び支那に戻って阿片商売の片棒を担(かつ)ぎ、今じゃ立派な阿片商人、そこらじゅうで悪評まき散らしてる。まさか、お前の元部下だったとはね」
そう言ってハナは、懐からロケットを取り出した。ブラゴベシチェンスクに向かう汽船の甲板で、はじめてハナを見た時、彼女が落としていった装身具だ。
ロケットを開けて、ハナは井口になかの写真を見せた。
「覚えているか？」
十三、四歳の頃のハナと、同じ年恰好の日本人らしい少女が写っているはずだ。
「右が、私だ。左の娘は、お前も知っているはずだ」
「覚えてねえ……」
井口は、苦しそうな息づかいで呻(うめ)いた。
「思い出せ！」
ハナは、今度は手の甲で、井口の股間を打った。井口は悲鳴をあげ、のけぞった。
「六年前の旅順だ！　忘れたとは言わせないよ！」
唇を歪(ゆが)め、頬を紅潮させて、ハナは叫んだ。
「この東洋鬼(トンヤンクイ)！」
その言葉は、台湾の戦場で、日本兵を去勢した罪で斬首されかかっていた台湾人の少女たちが、私たちに浴びせた憎悪の言葉だった。
「てめえ……」

井口は、必死に声を振り絞った。
「支那人の口真似なんぞしやがって……この売国奴！　すべた！」
「ああ、なんとでも言うがいい」
ハナは、またも井口の股間を蹴り上げた。
井口は、もはや抗弁する気力もなく、無言で悶絶するばかりだった。唇から血反吐がもれ、腹部が激しく痙攣していた。
ハナは怒鳴った。
「忘れたのなら言ってやる。この写真の娘は、六年前、お前たちが旅順で強姦した、三原ユキだ！」

六年前の明治二十七（一八九四）年十一月二十一日、日本軍は遼東半島の先端にある旅順を攻撃した。ここには清国軍の要塞が築かれていたが、清国軍の士気は低く、一日で陥落した。
旅順市街に突入した日本軍の掃討戦は、酸鼻を極めた。四日間にわたって女性や幼児を含む一般市民が大勢犠牲になった。市内のあちこちに、鼻や耳を削がれた友軍兵士の生首が吊されているという噂が日本軍内に拡がったのも一因だった。
「その一年前、あたしは親によって女衒に売られ、大連の遊郭で働かされていた。そこで知り合ったのが、このユキって娘さ。あたしは、どうしてもこの商売がいやだった。なかでも、日本人の客は虫酸が走るほど嫌いだった。あたしを抱いておいて、まっとうな仕事をしろとか説教しやがる。ある日、ある日本の役人があたしの事を『大日本帝国の大陸進出の先兵だ』とかいいやがるから、きんたま蹴って逃げ出した。ユキの手を引いてね」
ハナは続けた。
「旅順にたどり着いたあたしたちは、小間物屋を営んでいた林という支那人夫婦に引き取られた。林さん夫婦はあたしたちを可愛がってくれて、あたしたちはお店を手伝って働いた。そのうち、日本と清国が戦争になった」
開戦は明治二十七年七月。日本軍の旅順突入は、その四ヵ月後だ。
「幸か不幸か、あたしは脚の弱った林さん夫婦に代わって、対岸の威海衛に小間物を仕入れにいっていた。その途中で戦争が始まり、あたしはそこに足止めされた。やっと戦闘が終わって旅順に帰ってみたら、林さん夫婦は殺されていた」
唇を噛みしめ、井口を睨みつけながらハナは吐き出すように言った。
「ここまで言えば、思い出しただろう、え、帝国陸軍伍長、井口虎吉！」
井口は黙って、うなだれていた。ハナは、怒りを面差しに浮かべて続けた。
「近所の人に教わった。日本軍が入ってきてから三日目、四人の日本兵が林さんの店に押し入り、林さんたちを射殺し、ユキを手込めにした。それからユキをどこかに連れていったって……」
「本当なのか……？」

私は、いつしか井口の間近まで近寄っていた。
「貴様は、本当にそんなむごい事を……」
「お忘れですか……菊池中尉殿、あたしが言ったことを……」
井口は、嘲笑うように、言葉を絞り出した。
「よほど、お育ちがいいんですな」
――支那の姑娘(クーニャン)は、日本の女より体格がよくて、心おきなくいろんな事ができます。みんな言ってますぜ。
――俺らは故郷の家族のため、俸給を少しでも節約して送金してるんですぜ。女郎屋なんかで使っちまったら、もったいないじゃないですか。
――そこらの家に押し入って、やっちまうんでさ。大丈夫、ちょっと銃でおどしゃ、姑娘(クーニャン)の家族も抗議なんかしません。逆らえば、撃ち殺してやっても、問題にはなりません。
井口の言葉が脳裡に甦(よみがえ)った。
「貴様……まさか、本当に……」
私は烈しく罵(ののし)った。
「それでも、貴様、帝国陸軍軍人か！」
「そうだよ！」
答えたのは水野ハナだった。私の顔に平手打ちを浴びせ、叫んだ。
「それが、帝国陸軍軍人なんだよ！」

その後も、ハナの井口に対する拷問は、凄惨を極めた。
ハナがなぜ、ユキを強姦した日本兵が井口虎吉である事を知ったのか。井口は、不用意にも現場に陣中日記を忘れてきたからだ。ハナは、その陣中日記を手懸かりに情報を集め、ついに、その持ち主が満州で阿片商をやっている事を突き止めたのだ。
他にも、驚くほどハナは、井口についての情報をたくさん仕入れていた。口の堅かった井口だが、やがて白状をはじめた。
彼ら四人は、林夫婦を射殺し、ユキを犯した。井口とともに、ユキを強姦した三人の日本兵のうち二人はその後戦死したが、橋口(はしぐち)という一等卒は郷里の静岡に帰還したという。
「橋口は……確か勲章をもらって、村一番の金持ちの娘の婿(むこ)になったそうだ……」
息も絶(た)えだえに、井口は言った。
「頼む……あいつは、元は真面目な奴だ……俺が強引に誘ったんだ……だから……」
「もう、いいわ」
ハナは冷ややかに言った。
「後は、お前とは関係のないこと。お前は、やった事の報いを受けるんだね」
言うなり、ハナは腰のベルトにさしたナイフを抜き、井口のズボンを切り裂いた。さんざん蹴られて腫れ上がった陰嚢(いんのう)と、萎(しお)れた男根が露(あら)わになった。
「な、何をする……」

井口が眼を見開いた。ハナが、ナイフの刃を、井口の陰嚢に押し当てたからだ。
「や、やめてくれえ！」
井口は、最後の力を振り絞って絶叫した。ハナは耳を貸さなかった。あっという間に井口の陰嚢は切り裂かれた。ハナは、血を噴く陰嚢から睾丸を一個抉り出した。
眼を背ける暇もなかった。ハナは、血まみれの睾丸を井口の鼻先に突きつけ、そのまま握り潰した。
井口は恐怖に眼を見開いた。全身が烈しく痙攣していた。
「もう一個、潰すよ」
二つめの睾丸を抉って、やはり井口の目の前で潰した。井口は眼と口を大きく見開いたまま、意識を失った。
見ると、馬賊の男たちは皆、顔を背けていた。同じ男性として見るに耐えられなかったのだろう。
ハナは、ただひとり冷静な眼差しで腕組みしているソヒョンに、疲れ切ったような面差しで言った。
「부탁해、서 현（ソヒョン、お願い）」
ソヒョンは頷くと、ずだ袋から針と糸、消毒液の壜を取り出し、血が滴る井口の陰嚢を、顔色ひとつ変えずに縫合し、丁寧に消毒液でぬぐった。
私の意識はそこで途切れた。
私もまた、ハナが井口に加えた残酷すぎる責めに、同性として恐怖を覚えていて、それが頂点に達したのだ。

眼を覚ましたのは、昼過ぎだった。
ハナとソヒョン、宋紀はじめ馬賊の男たちは、食卓に坐って昼食をとっていた。
すでに死体は片付けられ――屋外の穴に埋められたらしい――、血の跡も丁寧に掃除されていた。部屋の隅の寝台には、いましめを解かれた井口が寝かされていた。熱にうなされていた。
「起きたか」
最初に気付いたのはソヒョンだった。私は、オンドルの床に、寝かされ、毛布をかけられていた。上半身を起こした私に、ソヒョンは湯の入った椀を差し出した。
私が湯を呑み終えるのを見て、ハナは、箸を食卓に置いて私に歩み寄った。
「そろそろ引き揚げるが……」
と、寝台に横たわる井口を指さし、ハナは言った。
「あの男をどうするか、お前が決めろ」
「私が、か？」
「そうだ」
ハナが馬賊たちに合図を送った。馬賊たちは、井口の体を寝台から下ろすと、倚子に座

らせ、縛り付けた。
井口は呻(うめ)いて眼を空け、うつろな眼差しを部屋じゅうに漂わせた。
「お前の運命は、彼が決める」
ハナは、脇の下のホルスターから拳銃を引き抜き、私に手渡した。
「彼を射殺するか、それとも撃たないか」
私は茫然として、ハナと井口を交互に見た。ハナは続けた。
「撃たないのなら、彼を倚子に縛り付けたまま、放置する。飢えと寒さで遠からず死ぬだろうが、ひょっとしたら万に一つ、通りかかった旅人に助けられるかもしれない。だが、残りの人生は、きんたま無しで過ごす事になる」
ソヒョンが支那語に通訳し、馬賊たちは笑った。
ハナは続けた。
「日本の軍人は、そんな屈辱に耐えられないはずだ」
「やめろ！」
井口が急に喚(わめ)いた。
「助けてくれ、死にたくない！　きんたまなんて無くていい！　お願いです、どうか、菊池中尉殿、殺さないでください！」
「だ、そうだ」
ハナは私を見つめて、冷たい口調で言った。
「すぐ決めてくれ。こんな家早く出たいから」
私は、しばし考え込んだ。
考えて、ひとつの結論に達したわけではない。私はもともと、こうするのを望んでいた気もする……。
私は、拳銃の銃口を井口のこめかみにあてがった。井口がびくりと身を震わせた。私は、こう井口に問うた。
「お前は、俸給を節約するため、女郎屋には行かず、銃で家族を脅して現地の娘を犯していると、そう言ったことがあったな」
井口は真っ青な面差しをハナに向けた。ハナが言った。
「日本の軍人は、そんな事を自慢し合ってるのか？」
ひとでなし……と吐き捨てるハナに、井口は抗弁した。
「知らない、俺はそんな事言ってない！」
私は重ねて問うた。
「いったい、幾人の娘を、むごい目に遭わせたのだ？」
井口は、眼に怯(おび)えの色を浮かべつつ、強がりな面差しをつくって喚(わめ)いた。
「みんな、やってた事なんだ！　俺だけじゃないんだ！　戦地なんだぞ！　明日をも知れぬ命なんだぞ！　一日過ぎたら、昨日まで仲良くやっていた仲間が死体になっちまう、そんな戦地まで召集令状一枚で連れてこられた俺たちの身にもなってくれ！」

「そうか……」

私は、ゆっくりと拳銃の引き金をひいた。

銃声が響いた。銃弾は井口の額を貫いた。眼球が眼窩(がんか)から落ちそうになるほど飛び出した。井口は絶命した。

「끝났어(クンナッソー)（終わったー）！」

ソヒョンが勢いよく立ち上がり、笑顔で伸びをした。馬賊たちも食卓を立って、荷物をまとめ始めた。

拳銃を握りしめたまま立ちつくす私の背中にハナが歩み寄り、そっと肩に手を廻した。

「これで、あなたの事を信じられる」

振り向いた私から身を離し、ハナは微笑んだ。

「今日から、仲間だよ」

その夜から、私は台湾で経験した悪夢を見なくなった。

（つづく）